

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 蘇轍「詩病五事」考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-26 キーワード (Ja): 蘇轍, 詩病五事, 詩話, 詩病, 五事 キーワード (En): 作成者: 石塚, 敬大 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000253">https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000253</a>

# 蘇轍「詩病五事」考

石塚敬大

## 一、序言

〔頽瀆遺老蘇轍は、杜門して著述に専念した。〕<sup>①</sup> その時期の作、「詩病五事」<sup>②</sup> については、專論<sup>③</sup> があり、蘇轍研究、詩学研究等にも言及が散見するが、いづれも真意を説くものとは言い難い。先師の学を敬慕しつつ、新釈を呈したい。

## 二、従来説への疑義

〔「詩病五事」に関する言説を確認する資料として、その簡潔性から、張海鵬氏『北宋詩学』<sup>④</sup> の記事を引く。

此乃蘇轍論詩札記之文、自与北宋其他詩話不同。不僅体例不同、觀念尤其特殊。蘇轍謹依傳統儒家詩教、僅就詩与義理的關係指摘五種「詩病」、觀點不免迂腐、

略遠詩人之趣。

当該作の全貌は後述に譲るが、右の指摘の是非を問うべく、以下に第一段を掲げる。

李白の詩、其の人と爲りに類し、駿發豪放、華なるも不實、好事にして名を喜び、義理の在る所を知らざるなり。用兵を語れば、則ち先登して陣を陥れ、以て難しと爲さず。游侠を語れば、則ち白晝に人を殺し、以て非と爲さず。此れ豈に其の誠能ならんや。白始め詩・酒を以て明皇に奉事し、讒に遇ひて去るも、至る所其の舊きを改めず。永王將に江淮を竊據せんとするに、白起して之に従ひて疑はず、遂に放たるるを以て死す。今其の詩を觀るに固に然り。唐の詩人李・杜もて稱首とするも、今其の詩皆な在するに、杜甫に義を好むの心有れば、白の及ばざる所なり。漢

の高帝豊沛に歸り、歌を作りて曰はく、「大風起こりて雲飛揚す 威海内に加はり故郷に歸る 安くにか猛士を得て四方を守らしめん」（「大風歌」と。高帝豈に文字を以て世に高き者ならんや。帝王の度の固然たる、其の中より發して自らは知らざるなり。白の詩之に反して曰はく、「但だ歌はん 大風に雲飛揚す 安くんぞ猛士を用ゐて四方を守らしめんと」（「胡無<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>詩」と。其の理を識らざるること此くのごとし。老杜の白に贈るの詩に、「細かに文を論ぜん」（「春日憶<sub>二</sub>李白<sub>一</sub>詩」の句有るは、此の類を謂へるや。（李白詩類其爲人、駿發豪放、華而不實、好事喜名、不知義理之所在也。語用兵、則先登陷陣、不以爲難。語游侠、則白晝殺人、不以爲非。此豈其誠能也哉。白始以詩酒奉事明皇、遇讒而去、所至不改其舊。永王將竊據江淮、白起而從之不疑、遂以放死。今觀其詩固然。唐詩人李杜稱首、今其詩皆在、杜甫有好義之心、白所不及也。漢高帝歸豊沛、作歌曰、「大風起兮雲飛揚 威加海内兮歸故郷 安得猛士兮守四方」。高帝豈以文字高世者哉。帝王之度固然、發於其中而不自知也。白詩反之曰、「但歌大風雲飛揚 安用猛士守四方」。其不識理如此。老杜贈白詩、有「細論文」之句、謂此類也哉。）

ここでは李白へのそれを確認できるが、詩作に名のある人物を挙げては痛烈な批難を加えるといった内容は全段に互り、先の張海鵬氏が、体裁も然ることながら思想こそ独特とした点には、一応肯かれる。また、この作品に注目しつつ蘇轍の思想性を論じた、曾棗莊氏の言も併せて掲げる。

揚杜抑李本是宋人的普遍傾向、不足深責。但蘇轍這段話確實太過頭了、以至被人斥為「狂悖庸妄」。（錢振鏞『詩話』卷上）

頑迷固陋なる頽演遺老の独特にして過剰な作、「詩病五事」は、もはや異端の感すら深めている。しかし、一見して奇異な印象を抱かせる作品も、仔細に検討すれば系統を看取できようし、その試みなくして結論には至るまい。先ずは、「詩病」を扱うその他の記事を吟味する要がある。

いまひとつには、「詩病五事」の構成に意図を疑う試みが求められる。これに関連して、佐藤保先生の論文<sup>(7)</sup>を引く。

『文集』収録の「筆説」一卷は、弟子の蘇轍がかれの家にあつた欧陽修の書きものをまとめたものである。末尾に、蘇轍の元豊二年（一〇七九）正月の題記をもつが、その中に「李白杜甫詩優劣説」という一文があり、欧陽修は、李白の「襄陽歌」の数句をひいて李白詩の特徴である「横放」（奔放さ）を述べながら、

杜甫が李白を凌駕するのは「精強」(精密な表現を駆使してのつよさ)という面だけで、李白の「天才自放」(天才をもちみずからをとき放つ)点においては、杜甫はとうてい及ぶべくもない、と論じている。後世の李杜優劣論の嚆矢となったこの一文からは、総体的に李白の方が杜甫よりも優れている、と説いているように見える。

約三十年の隔たりこそあれ、蘇轍が李白と杜甫との比較に筆を執る際、右に見る「李白杜甫詩優劣説」を想起せずにいたとは見做し難い。むしろ晩年の杜門塾居に在つては、歐陽脩その人や彼の活躍期にまで回顧は及び得ようし、落差に嗟嘆する姿をそこに想像することさえ許されまいか。

孫の蘇籀が著した『樂城遺言』は、この疑念を一層深める。

公曰はく、李太白の詩の人に過ぐるや、其の平生の享く所、浮花浪蕊のごとくんばなり。其の詩に云ふ、「羅幃舒卷 人の開く有るに似たり 明月直入し 無心にして猜ふべし」(「獨漉篇」と。及ぶべからずと。(公曰、李太白詩過人、其平生所享、如浮花浪蕊。其詩云、「羅幃舒卷 似有人開 明月直入 無心可猜」。不可及。)

別段ないところから詩興を生み出す李白の才、歐陽脩の

言う「天才自放」を認めた言質である。「詩病五事」が別の結論を導くのは、単に杜甫を揚げるためではあるまい。

同様の指摘は、続く第二段においても可能である。ここでは『詩經』大雅「騷」を範として掲げたうえで、杜甫「江頭に哀しむ(哀江頭)」詩を示し、「詩人の遺法を得たり(得詩人之遺法)」と評する。一方、これに対する白居易については、詩句の引用もなまま、以下のように論断する。

白樂天の詩のごときは、詞甚だ工なるも、然れども紀事に拙く、寸歩すら遺さざるに、猶ほ之を失ふを恐るるがごとし。此れ老杜の藩垣を望めども及ばざる所以なり。

(如白樂天詩、詞甚工、然拙於紀事、寸歩不遺、猶恐失之。此所以望老杜之藩垣而不及也。)

ところが、蘇轍の詩文に見える白居易評はこれに異なる。蓋し唐世の士大夫、達者樂天に如くは寡かりしならん。

(蓋唐世士大夫、達者如樂天寡矣。)

「書『白樂天集』後 二首」

樂天・(劉)夢得老ひて相從ひ 樂天夢得老相從  
洛下の詩流二雄を得たり 洛下詩流得二雄

「讀『樂天集』戲作『五絶』」其一

右はそれぞれ、『欒城後集』（卷二十一）、『欒城第三集』（卷三）所収の作であり、白居易を高く評価している点に加え、隱居の日々における白居易への愛着傾向をも窺い知れよう。これらを覆すかのごとき主張もまた、「詩病五事」各段の内容や配置について、何らかの意図を疑わせる。

従來說に見る特異性を受け容れようにも、これらを等閑に附すことにはなお躊躇する。以下に、「詩病」と「五事」のそれぞれについて論じ、あらためて「詩病五事」の文学的位置付けを確認するとともに、作品の真意に迫りたい。

### 三、「詩病」概観

そもそも「詩病」とは、詩話隆盛以前に成る詩格や詩式に見えるものである。以下に張伯偉氏の言を掲げる。

病犯。見《文鏡秘府論》西卷。空海在《論病》中指出：（周顥・沈）約已降、（元）兢・（崔）融以往、聲譜之論鬱起、病犯之名爭興。家製格・式、人談疾累。引用者  
「明確提出「詩病」之説、實始自沈約。……可見、唐人論病犯、有時還比較注意音律及文字的自然性、顯得較爲靈活。這也是衆多詩人通過長期實踐以後得出的結論。」

右の過程を形式の上から緋けば、その記述に採択された

型は二種類ある。すなわち、詩や詩句を掲げて診断を下すものと、「詩病」の分類、及びその解説を記すものである。ここでは仮に、前者を教示型、後者を教則型と呼ぶ。

教示型とは、外ならず、探究者に教示する型の謂であるが、文学的系統に関して言えば、答述を主とする問答文学である。<sup>(10)</sup> その淵源は、有能者<sup>シャーマン</sup>を介する神言・神意の記録であり、後には『論語』のごとき有識者・有徳者の言行録となる。前者が絶対的權威を持つことは勿論、後者もまた、探究者が指針として拠るところである。いずれも、自身の思索では及ばぬ高次な見解、乃至は理念を書き留めたものであるが、その筆録の意義は、時や場を分かつ者が共有できる点にこそあると言えよう。

この型の例として、王叡『炙轂子詩格』「句病體」を掲げる。詩に云ふ、「沙摧きて金井竭き 樹は老い玉塔は平らかなり」と。上句は五字一體、血脈相連なる。「樹」と「玉塔」とのごときは是れ二物にして、各體の血脈相連ならず。

（詩云、「沙摧金井竭 樹老玉塔平」。上句五字一體、血脈相連。若「樹」與「玉塔」是二物、各體血脈不相連。）

右は、有識者の教示のみを記すが、傾聴者や読者の関心を前提とする答述である。この点をより明確に示す例とし

て、神或『詩格』「詩病を論ず（論詩病）」の記事がある。

夫れ詩を爲る者は、全篇もて玄妙に造るを得難し。

「人の藍田に宰たるを送る」に「瘦馬は餐粟稀に 羸童は錢を識らず 君のごとく苦節に清くんば 到る處人の傳ふる有らん」（裴説「送人宰<sub>レ</sub>邑」詩）と。或るひと問ふ、「此れ詩病何れの處にか在る」と。曰はく、上の兩句有りて了はるも、又「苦節に清し」と言ふは、是れ重疊なり。賈鳥が「藍田主簿に贈る」に「久しく別る 丹陽の浦 時時 釣船を夢む」（題<sub>二</sub>皇甫荀藍田廳<sub>一</sub>詩）と。此くのごとき斷句、方に佳と爲さんと。（夫爲詩者、難得全篇造於玄妙。「送人宰藍田」「瘦馬稀餐粟 羸童不識錢 如君清苦節 到處有人傳」。或問、此詩病在何處。曰、有上兩句了、又言「清苦節」、是重疊也。賈鳥「贈藍田主簿」「久別丹陽浦 時時夢釣船」。如此斷句、方爲佳矣。）

「或問」からの一文と、答述の「曰」については、先の『炙轍子詩格』の記事にも挿入が可能である。換言すれば、これを除いて、両者に拮ぶところは無いということである。

さて、詩作の指南書である詩格は、貢拳と相俟つて隆盛に至るのであったが、その成立の陰に、聯句に興じた「無名の坐客」の存在を指摘する愛甲弘志氏は、詩格の体裁の

不揃いな点に注目し、「必ずしも不特定多数の読者を想定していなかった」としたうえで、以下のように述べる。<sup>11)</sup>

詩格もその大多数は限られた場で論じられたものをまとめた札記のようなものであったのではないだろうか。そうするとそれらの作者が〈舊題〉とされて不明確であるのは言うに及ばず、作者が明らかにされているものも、或いは本人の手を経たものではなく、周囲の者が書き留めたという可能性もあり得るであろう。今日、伝わっている詩格の殆どが完全ではないのも、この辺りに起因しているからではないだろうか。つまり詩格の書を支えていた人たちの存在をここに見るのである。

教示型が実践の記録である以上、事前に読者を想定したか否かについては、論述の型を眺めるうえで影響のないところであるが、氏の言を踏まえると、教示型とは、当を得た指摘、乃至は一致を見た詩評の記録であると言えよう。問答文学において想起されるものは、例えば、『楚辭』「卜居」において、屈原が、「願はくは先生に因りて之を決せん（願因先生決之）」と述べ、種々の選択肢を挙げた後「此れ孰れか吉孰れか凶ならん。何れをか去り 何れにか従はん（此孰吉孰凶。何去何従）」と問うたがごとき、探究者

の真摯な姿勢である。しかし、「詩病」に関する実態としては、場に臨む者はいずれも探究者であり、また教示者であり得たということになる。このような集団の特質については注目してよいが、詳細は後述に譲ることとする。

一方、教則型とは、以下に掲げる『周禮』天官冢宰「大宰之職」のごとく、ある時期において継承すべき内容を精査し、既に体系化の成された形で説明していくものを謂う。

邦の六典を建つるを掌り、以て王の邦國を治むるを佐く。一を『治典』と曰ひ、以て邦國を經め、以て官府を治め、以て萬民を紀む。二を『教典』と曰ひ、以て邦國を安んじ、以て官府に教へ、以て萬民を擾らす。……。

(掌建邦之六典、以佐王治邦國。一曰治典、以經邦國、以治官府、以紀萬民。二曰教典、以安邦國、以教官府、以擾萬民……。)

「詩病」の主眼が詩作の技巧面に置かれた時期においては、先の教示型に、新生面を開き続ける意外性や、問答の反復によって核心部を披露していく複雑性などは想定し難く、一時的に限界が訪れる。対する教則型は、「詩病」に関する知識の普及定着に有効であり、必然的に主流となつたのである。こちらに関しては、愛甲氏の言う「不特定多

数の読者」を想定して良い。

教則型の例として、梅堯臣『續金鍼詩格』「詩に八病有り(詩有八病)」を掲げ、後に二点の指摘を加える。

一を「平頭」と曰ふ。第一字、第六字と同聲なるを得ず。第二字、第七字と同聲なるを得ず。詩に曰はく、「今日の良宴會 歡樂 具さには陳べ難し」(古詩十九首其四)と。「今」、「歡」と同聲(去声)、「日」、「樂」と同聲(入声)なり。二を「上尾」と曰ふ。第五字、第十字と同聲なるを得ず。詩に曰はく、「西北に高樓有り 上は浮雲と齊し」(古詩十九首其五)と。「樓」、「齊」と同聲(平声)なり。……。

(二曰平頭。第一字、不得與第六字同聲。第二字、不得與第七字同聲。詩曰「今日良宴會 歡樂難具陳」。今與歡同聲、日與樂同聲。二曰上尾。第五字、不得與第十字同聲。詩曰「西北有高樓 上與浮雲齊」。樓與齊同聲。……。)

梅堯臣は、白居易『金鍼詩格』に見る病名の列举(「一曰平頭。二曰上尾。……。」)を不十分とし、これに補筆して、『續金鍼詩格』の同項を成した。これは、知的財産の継承に重きを置き、教則の充実化を期したためと見える。同時に、幾多の詩作者が経験をもとに議論を重ねた



「詩病」は、一応の完結を見たというべきである。何となれば、教則型は、探究者個々の疑問に対処するものではなく、伝授する側の用意した内容を全てとするためである。

一方で、梅堯臣について留意すべきは、自身の観点から、従来の枠を越えた「詩病」を見出ししていたことが、彼と親交の深い歐陽脩の『六一詩話』から窺える点である。

#### 四、歐陽脩『六一詩話』

これまで、「詩病」論述の型には、教示型と教則型とがあり、「詩病」の共有化が肝要と見るや、教則型が主流となった旨を述べた。しかし、以降に成る詩話においては、詩や詩句を話題とする教示型が採用されることとなる。

以下に掲げる『六一詩話』の記事から、その形式と内容とを確認されたい。内容に関しては、評価基準の変化に加え、先に保留とした、集団の特質についても指摘する。

聖俞嘗て云へらくは、詩句の義理通ずと雖も、語の淺俗に涉りて笑はるべき、亦た其れ病なり。「漁父に贈る」の一聯に「眼前見えず市朝の事 耳畔惟だ聞く風水の聲」と云ふ有るがごとし。説く者云ふ、「肝腎を患ふの風なり」と。又、「詩を詠ずる者」に云ふ

有り、「盡日覓むるも得ず 時有り還りて自ずから來たる」と。本と詩の好句の得難きを謂へるのみなるも、説く者云ふ、「此れは是れ人家の猫兒を失卻せるの詩ならん」と。人皆な以て笑を爲すなりと。

（聖俞嘗て云、詩句義理雖通、語涉淺俗而可笑者、亦其病也。如有「贈漁父」一聯云「眼前不見市朝事 耳畔惟聞風水聲」。説者云、患肝腎風。又有「詠詩者」云「盡日覓不得 有時還自來」。本謂詩之好句難得耳、而説者云、此是人家失卻猫兒詩。人皆以爲笑也。）

先ず、論述の型については、「聖俞嘗て云」を除き、これまで見てきた教示型の例と同様である。ただし、短絡的にこれを自他変容の型と見做すばかりではない。「聖俞嘗て云」は、例えば「或云」とは意味合いが異なり、世に名高い梅堯臣の見解なのである。また、何らの言及もないうま『六一詩話』に収録されている事実は、歐陽脩がこれに首肯したことを意味する。大方の読者は、高名な両者の共通見解を前に、ひとまずは受容せざるを得まい。まして、梅堯臣や歐陽脩に效おうとする者にとつては尚更である。

また、内容については、一見したところ、或る日の談笑風景のようではある。しかし、話題の詩が、いずれも詩僧貫休のものである点に注目すると、その実態が浮かび上



がつてくる。なお、歐陽脩自身の言にも、技巧に奔走する詩作者を嗤うものがあり、今ほど述べた実態については、こちらがより顕著である。併せて掲げ、それを確認したい。

詩人好句を貪求して、理に通ぜざる有るも、亦た語病なり。「袖中の諫草 天に朝して去り 頭上の宮花 宴に侍して歸る」(王操「贈相國」詩)のごときは、誠に佳句爲るも、但だ諫を進むるに必ず草疏を以てし、直だに稿草を用ゐるの理無し。唐人に云ふ有り、「姑蘇臺下の寒山寺 半夜の鐘聲 客船に到る」(張繼「楓橋夜泊」詩)と。説く者も亦た云ふ、「句は則ち佳なるも、其れ三更のごときは是れ鐘を打つ時ならず」と。賈島が「僧を哭す」に「寫し留む 行道の影 焚卻す 坐禪の身」(「哭柏岩和尚」詩)と云ふがごときは、時に謂はる、「活ける和尚を焼殺せり」と。此れ尤も笑ふべきなり。「歩は隨ふ 青山の影 坐して學ぶ 白塔骨」(贈智朗禪師「詩」)、又、「獨り行く 潭底の影 數し息ふ 樹邊の身」(送無可上人「詩」)のごときは、皆な島の詩にして、何ぞ精粗の頓に異ならんや。

(詩人貪求好句、而理有不通、亦語病也。如「袖中諫草 朝天去 頭上宮花侍宴歸」、誠爲佳句矣、但進諫必

以草疏、無直用稿草之理。唐人有云「姑蘇臺下寒山寺 半夜鐘聲到客船」。説者亦云、句則佳矣、其如三更不是打鐘時。如賈島「哭僧」云「寫留行道影 焚卻坐禪身」、時謂燒殺活和尚。此尤可笑也。若「歩隨青山影 坐學白塔骨」、又「獨行潭底影 數息樹邊身」、皆島詩、何精粗頓異也。)

先ず、詩格における「詩病」の記事が表現に関するものであったのに対し、『六一詩話』におけるそれは、内容に重点を置くものであることを指摘できる。そして注目すべきは、便宜上、段を設けた後に見る、賈島の滑稽化である。先ほどの梅堯臣が貫休の詩を挙げたのも、実はこれと意図を同じくするものであり、いわゆる見せしめである。

集団内における嘲笑は、その集団を構成する各人の言動を規制する。人々は、恥辱と排除とを受けぬよう留意する際、自身の見解を、集団のそれに摩り替えるのである。『社会学的方法の基準』(一八九五年)において、斯様な集団意識の拘束力を説いたエミール・デュルケーム氏は、「宗敎生活の起源についての講義」(一九〇七年)において、以下のように述べている。

社会が一人の人間に熱中することがあれば、すぐこの人間は極度の崇拜の対象となり、いかほどか神格化さ

れるのに十分なのである。同じように、集合的信仰は聖なる特性をとるのである。この信仰について論議することは全く冒瀆と見られるようになるのである。

文章で名を馳せた歐陽脩には、圧倒的な存在感を有する自らを中心とした、有形無形の集団が形成される。共に詩を語る者や、『六一詩話』の読者、私淑する人々がそれにあたる。すると、『六一詩話』は、かつて紅勒帛により文体を一変させたほどの露骨さはないものの、新たな「詩病」の提示により、彼の支持者、及びその周辺に対して、詩作の捉え方に変化を齎すことが可能であったわけである。

世の詩作者の観点は、如何に詩句を整然と並べるかといった点に陥っている。従来の「詩病」を前提から外さないまでも、過度に技巧面を重視した詩作の在り方には一石を投ずる必要があった。そのなかで歐陽脩らは、主眼を別に置く「詩病」を論じたのであったが、このことが、「詩病」の記事に新規の観点を認めることとなった。

あらためて「詩病五事」を眺めることとしたい。記述の型は教示型に分類されるものであり、その観点については、自身の価値基準に基づいているが、これは既に前例のあることである。また、前掲の第一段に関して言えば、李杜の優劣を含む前半の李白評がやや分量を持つものの、漢の高

帝の「大風歌」を肯定し、それを踏まえた李白詩を否定する箇所は、その根拠も含め、『六一詩話』を一瞥した後は、別段の違和感を覚えるものではないように見受けられる。

「詩病」の記事の概観を通じては、「詩病五事」が前例から逸脱した作品であるとは見做せない。また、過剰とも取れる痛烈な批判についても、梅堯臣や歐陽脩の例に見る滑稽化と軌を一にし、詩作者の観点に刷新を迫るものであったのであり、その先に用意されている全段を通じての主張を、より鮮烈なものにする構造下にあったと見える。

## 五、蘇轍「洪範五事説一首」

「詩病五事」の第一段・第二段に見る、李白・白居易への言及に覚える違和感を解消するためには、「五事」を確認する必要がある。そもそも「詩病」の記事の前例に倣えば、「詩有五病」と題されていたはずであるし、『欒城第三集』が、「詩病五事」の直前に「洪範五事説一首」を収めている点については、より早くに注目されるべきであったろう。以下にその冒頭を示し、「五事」に関する言及を確認する。

昔禹『洛書』を觀て、九疇の次を得、「初め一を五行と曰ひ、次いで二を敬むに五事を用ゆと曰ふ」と。

二者は天・人の道にして、九疇の源本なり。漢の劉向父子、始め諸儒の説を采りて、『五行傳』を作る。其の五事を論ずるや、其の實を失ふ者 過半なるも、後世之に因る。予以て然らずと爲し、乃ち之が爲に説きて曰はく、

五行は天事なり。五事は人事なり。五行の先後、天事を以て之を言ふ。五事の先後、人事を以て之を言ふ。……人の生まるるや、形色具はりて聲氣之に繼ぐ。形氣具はりて視聽之に繼ぐ。形氣・視聽具はりて喜怒哀樂の變至り、喜怒哀樂既に至りて思焉より生ず。喜怒哀樂の未だ至らずんば則ち思無く、爲無きなり。思無く爲無くんば則ち性なり。性は五事にあらずして五事の依る所なり。故に形色 貌を爲し、聲氣 言を爲し、目 視を爲し、耳 聽を爲し、心思を爲し、此れ五事の先後を爲す所以なり。

（昔禹觀『洛書』、而得九疇之次、「初一日五行、次日曰敬用五事」。二者天人之道、而九疇之源本也。漢劉向父子、始采諸儒之説、而作『五行傳』。其論五事、失其實者過半、後世因之。予以爲不然、乃爲之説曰、五行天事也。五事人事也。五行之先後、以天事言之。五事之先後、以人事言之。……人之生也、形色具而

聲氣繼之。形氣具而視聽繼之。形氣視聽具而喜怒哀樂之變至、喜怒哀樂既至而思生焉。喜怒哀樂之未至則無思也、無爲也。無思無爲則性也。性非五事而五事之所依也。故形色爲貌、聲氣爲言、目爲視、耳爲聽、心爲思、此五事之所以爲先後也。）

前段について、身近なところでは父の蘇洵に「洪範論」〔嘉祐集〕卷八）があるなど、洪範への注釈の試みは蘇轍に限られるものではない。むしろ宋代において洪範解釈が盛んに行われていた事実は、既に吾妻重二氏や小島毅氏の論考に見えるものである。ときに吾妻氏は、宋代に成る洪範関連の專著を一覧化したうえで、以下のように述べる。

宋代において經書中の一篇が單行し、それに注釋、解説が多く施されたものの筆頭が『大學』『中庸』であることは言うまでもないが、この數量はそれに次ぐものであるかもしれない。

右は、宋代全体を俯瞰しての言ではあるものの、先の蘇洵にせよ、蘇轍にせよ、こういった時代の潮流は認識し得ていた。それは、災異説の是非を問う、学問的、政策的な議論であったが、また別の側面を有するものともなった。

神宗朝には、周知の如く舊法黨側から王安石の罷免を求めて災異説が執拗に提出されることになる。これは

かなり政治色の強いものであったが、その論據の一つが洪範に求められていたことは改めて注意する必要がある。また……この時期には洪範の注釈としても王安石を攻撃するものが現れたのである。(同前)

神宗の治世(一〇六七—一〇八五)からは歳月を隔てるものの、ここに見るがごとく解釈の有り様が、「詩病五事」の前段階としてあった。いまはそれに留め、本題に戻る。さて、後段の内容は、概ね以下のように解釈できよう。

「五事」は「人事」であり、人が成長していく過程に即して順序が定められている。世に生を受けた人(貌)は、先ず声を発して(言)周囲と関わりとうとする。続いて、自身置かれた環境内にある事物、状況をその眼で捉えようとし(視)、教えを聞いて(聴)真相や是非を知る。これらの経験に付随して感情が細分化された後、自ら考える(思)。

これにやや言及すると、新生児はまだ目の開かぬうちに産声を挙げるのであるから、「言」は「視」・「聴」に行しよう。また、「視」と「聴」とは、右に見る通りに並列ではない。加えて、人は学びを得るごとに新たな存在となり、同じ順序で更なる成長を遂げていくのである。

これをふまえて「詩病五事」にかえると、先ず問題視さ

れるのは、李白詩に見る不誠実さであり、続いて指摘されるのは、白居易の筆致の不足であった。これらは、「貌」を整え、「言」を磨く必要性を説くものと見える。従来の詩格における「詩病」の記事も「言」の習得のための知識と言えようが、それに先立つ修養がなければ、畢竟、虚言空言の列挙であり、巧言令色の類となるよりない。梅堯臣や歐陽脩が憂慮した点をも解消し得る主張であると言えよう。

続く第三段では、文王、武王の征伐の様子を伝える『詩經』大雅「皇矣」及び「大明」について、「其の征伐の盛んなるを形容すること此に極まれり(其形容征伐之盛極於此矣)。」と賞したうえで、劉闢の最期を詠んだ韓愈「元和聖德詩」を引き、作者の蒙昧さ、「視」の難点を挙げる。

此れ李斯の秦を頌して言ふに忍びざる所にして、退之自ら雅・頌に愧づる無しと謂へるは、何ぞ其れ陋ならんや。

(此李斯頌秦所不忍言、而退之自謂無愧於雅頌、何其陋也。)

さて、「詩病五事」の読解に際して、「洪範五事説一首」との併読を要する点は既に指摘し得たように思うが、作品の主題を検討するにあたり、第四段は、全容を掲げる。

唐人詩を爲るに工なるも、道を聞くに陋なり。孟郊嘗て詩に曰ふ有り、「薺を食へば腸も亦た苦く、強ひて歌ふも聲に歡無し。門を出づれば礙有るがごときに

誰か謂はんや天地寛しと」(贈「別崔純亮」詩)と。郊耿介の士なるに、天地の大なると雖も、以て其の身を安んずる無し。起居飲食にすら、戚戚の憂ひ有り、是を以て卒に窮して以て死す。而れども李翱之を稱し、郊の詩を以爲へらく、「高處は古に在りて上無く、平處すら猶ほ下に沈(約)・謝(靈運)を顧る」(「與三梁肅補闕一書」)と。韓退之に至るも亦た談じて口に容れず。甚だしきかな、唐人の道を聞かざるや。孔子顔子を稱すらく、「陋巷に在り、人は其の憂ひに堪へず、回や其の樂しみを改めず」(「論語」雍也)と。回窮困して早に卒すと雖も、而れども其の身を處するの非に非ず、以て命と言ふべく、孟郊と異なれり。

(唐人工於爲詩、而陋於聞道。孟郊嘗有詩曰、「食薺腸亦苦、強歌聲無歡。出門如有礙、誰謂天地寛」。郊耿介之士、雖天地之大、無以安其身。起居飲食、有戚戚之憂、是以卒窮以死。而李翱稱之、以爲郊詩「高處在古無上、平處猶下顧沈謝」。至韓退之亦談不容口。甚矣、唐人之不聞道也。孔子稱顔子「在陋巷、人不堪其

憂、回也不改其樂」。回雖窮困早卒、而非其處身之非、可以言命、與孟郊異矣。」

この段は、「詩病五事」の構成を捉えるうえで注目できる。その内容を見ると、苦澁を吐露する孟郊と、仁に安んずる顔回との差異を説くものであるが、そもそも、「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり(朝聞道、夕死可矣)。」(「論語」里仁)を地で行く顔回との比較に堪え得る人物は稀有であろう。しかしながら、批判すべきはひとり孟郊のみならず、李翱も然り、韓愈もまた然りとし、この第四段に至っては、唐人、及びその詩を、まとめて一蹴するのである。

勿論、これは誇張というものであつて、断章取義の許されるところではない。蘇轍の意図は、詩において一流と目される唐代の人々を貶めることにより、続いて触れる宋代の人物への関心を高めることにある。ただし、読者は錯覚して期待を寄せてはならないのであり、以下に見るものは、「貌」、「言」、「視」、「聽」のそれを上回る、「思」に関する「詩病」である。そして、その批難の矛先は、蘇轍にとつては理想実現の桎梏となつた、王安石に向けられている。

## 六、王安石批判

第五段については、「詩病五事」全一千四百三十三字中、実に五百五十一字を費やしている。その内容は、政策的見解、新法党批判のふたつに分けられる。

その前半には、『書經』（武成）、『孟子』（離婁上、滕文公上）を引くが、これを眺めるだけで大凡の内容は理解できる。

「大邦は其の力を畏れ、小邦は其の徳に懐く。」

「罪を巨室に得ずんば、巨室の慕ふ所、一國之を慕ふ。」  
「物の齊しからざるは、物の情なり。」

（「大邦畏其力、小邦懷其徳。」・「不得罪於巨室、巨室之所慕、一國慕之。」・「物之不齊、物之情也。」）

聖人が天下を治めた際にも「大邦」や「巨室」は存在しており、また、州や県には、その規模に応じた富裕層が存在する。それ自体は問題ではなく、共に在るべく導けばよいと説くのである。そして、自身と相反する政策を掲げる新法党の主導者、王安石に対しては、以下のように述べる。

王介甫は、小丈夫なり。貧民に忍びずして深く富民を疾み、志富民を破りて以て貧民に恵みせんと欲し、其の不可なるを知らざるなり。方に其の未だ志を得ざるや、「兼并」の詩を爲り、其の詩に曰はく、「……」と。

（王介甫、小丈夫也。不忍貧民而深疾富民、志欲破富民以惠貧民、不知其不可也。方其未得志也、爲「兼并」之詩、其詩曰、……。）

憚ることなく王安石を「小丈夫」と言い、その富める者から搾取する発想を否定する。いまここに、五言二十四句からなる「兼并」詩を掲げることがはしないが、この詩が王安石の方針を定め、後の混乱の元凶となったとしている。

其の志を得るに及び、専ら此を以て事と爲し、青苗法を設けて以て富民の利を奪ふ。民に貧富無きも、兩税の外に、皆な出息を重ねること十二、吏縁姦を爲して、倍息に至る。公私皆な病めり。呂惠卿之を繼ぎ、手實の法を作り、私家の一毫以上なるは、皆な官に籍す。民其の奪取の心有るを知り、田を賣り牛を殺して以て其の禍を避くるに至る。朝廷其の不可なるを覺り、中止して行はざれば、僅かに乃ち亂を免かる。然れども其の徒世よ其の學を守り、下に刻にして上に媚ぶ、之を「享上」と謂ふ。一たび享上せざること有らば、皆な廢して用ゐざらん。今日に至りて、民遂に大いに病めるは、源と其の禍此の詩より出づ。蓋し昔の詩病、未だ此のごとき酷き者有らざるなりしならん。（及其得志、專以此爲事、設青苗法以奪富民之利。民



無貧富、兩税之外、皆重出息十二、吏緣爲姦、至倍息。公私皆病矣。呂惠卿繼之、作手實之法、私家一毫以上、皆籍於官。民知其有奪取之心、至於賣田殺牛以避其禍。朝廷覺其不可、中止不行、僅乃免於亂。然其徒世守其學、刻下媚上、謂之享上。有一不享上、皆廢不用。至於今日、民遂大病、源其禍出於此詩。蓋昔之詩病、未有若此酷者也。

この「詩病」が最も深刻であるのは、その誤った思考が政治を混乱させたためである。そしてそれは、呂惠卿をはじめとする人々の思考をも悪しき方向に導き、無批判に「享上」する輩には、それを止める手立てを講ずる発想がない。政界もまた、「病」を抱えているのである。

「人事」であるところの「五事」の最終項目、「思」とは、適正な思考であり、また、それによって世に貢献することであろうから、人材の育成とは不可分となる。王安石の「思」を批難した蘇轍が「詩病五事」を著したのは、自身の「思」を後生に示し、範とするためであったのではあるまいか。ところで、「詩病五事」については、その奇異な印象によって、謂わば、作品のみが独り歩きしてしまった感が否めない。そこで、最後に、晩年の蘇轍の状況について少しく触れ、本稿を終えることとしたい。

難多く晩には流落し 多難晚流落  
歸り來たるも死生を分かたる 歸來分死生

晨光 殘月に迫り 晨光迫殘月

回顧するも長庚を失へり 回顧失長庚

右は、兄蘇軾の遺作を手にした際の悲嘆である。⑤いわゆる党派抗争が劣勢に至つて後、その已まざる災禍は、兄弟の「夜雨對牀」への希求すらも虚しくしてきた。そして遂に、燦然たる輝きを放つてきた蘇軾が、次世代の台頭していくなかで、その生涯を閉じる。蘇轍の無念さは如何許りであつたらうか。

また、こうした境遇に在つては、没頭こそが良策であつたとも言えようが、『欒城後集』、『欒城第三集』を成した精力的な執筆活動には目を見張るものがある。しかし、その学識と気魄とを以てしても、政界に蔓延する「病」を前にしては、もはや老いを嘆くより他にあるまい。浮沈を見た生涯の斯様な終局に成る「詩病五事」は、後世の変革の士に宛て、善政の追及を託したものであつた、そのように思われるのである。



## 七、結言

従来、異色の論説文と目されてきた「詩病五事」について、「詩病」と「五事」のそれぞれに検討を加え、文学的系統及び構成の意図を指摘し、本来問われるべき作品の主題に關して卓見を呈してきた。諸賢の叱正を乞う次第である。

一層の蘇轍研究を期し、今後の課題に代える。

## 注

- (1) 蘇轍「穎濱遺老傳」下（『欒城後集』卷十三）「凡居」筠・雷・循「七年、居」許六年。杜門復理「舊學」。
- (2) 『欒城第三集』卷八所収。吳叔樺氏「蘇轍年譜簡表」（萬卷樓圖書股份有限公司「蘇轍學術思想研究」二〇〇七年五月）に拠れば、没する前年、一一一一年の作。
- (3) 陸德陽氏「蘇轍《詩病五事》評析」（華東師範大学出版社 古代文学理論研究第二十四輯『中国文論的常与変』二〇〇六年十二月）。袁玉鵬氏・徐超氏「詩論蘇轍《詩病五事》詩学思想」（山東省作家協會『時代文学』二〇一一年八月）は、後に一書を成す際の一記事的分量である。
- (4) 吹野安博士「中國古代文學發想論」（笠間書院 笠間叢書 二〇二一九八六年十二月）ほか参照。
- (5) 張海鷗氏『北宋詩学』（河南大学出版社 二〇〇七年六月）第

八章北宋「話」体詩学 第三節蘇轍《詩病五事》

- (6) 曾棗莊氏「蘇轍的文芸思想」（『文藝理論研究』一九八六年一月）
  - (7) 佐藤保先生「歐陽修の詩」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第四号 一九八五年四月）
  - (8) 張伯偉氏『全唐五代詩格彙考』（江蘇古籍出版社 二〇〇二年四月）詩格論（代前言） 貳從《文鏡秘府論》看初盛唐的詩格
  - (9) 蔡鎮楚氏・龍宿莽氏「比較詩話学」（北京図書館出版社 二〇〇六年八月）に、「歐派詩話」・「鍾派詩話」の呼称を用いた分類がある。区分上の着眼点に拮ぶところはない。
  - (10) 『増補巫系文學論』（大學書房 一九六九年一月）問答文學。「巫系文學系統表」に「主」答述」とある。
  - (11) 愛甲弘志氏「中晚唐五代の詩格の背景について」（『京都女子大学人文論叢』第五十四号（二〇〇六年一月））
  - (12) 小関藤一郎氏編・訳『デュルケム宗教社会学論集』増補新版（行路社 一九九八年一月）に拠る。
  - (13) 吾妻重二氏「洪範と宋代思想」（『東洋の思想と宗教』第三号 一九八六年六月）
  - (14) 小島毅氏「宋代天譴論の政治理念」（『東洋文化研究所紀要』第一〇七冊 一九八八年十月）
  - (15) 「題」東坡遺墨卷「後」詩（『欒城第三集』卷二）自九句至十二句。
- 「キーワード」蘇轍、詩病五事、詩話、詩病、五事